

6:1 くびきの下にある奴隷は、自分の主人を十分に尊敬すべき人だと考えなさい。それは神の御名と教えとがそしられないためです。
6:2 信者である主人を持つ人は、主人が兄弟だからといって軽く見ず、むしろ、ますますよく仕えなさい。なぜなら、その良い奉仕から益を受けるのは信者であり、愛されている人だからです。あなたは、これらのことを教え、また勧めなさい。

6:3 違ったことを教え、私たちの主イエス・キリストの健全なことばと敬虔にかなう教えとに同意しない人がいるなら、

6:4 その人は高慢になっており、何一つ悟らず、疑いをかけたり、ことばの争いをしたりする病気にかかっているのです。そこから、ねたみ、争い、そしり、悪意の疑りが生じ、
6:5 また、知性が腐ってしまつて真理を失った人々、すなわち敬虔を利得の手段と考えている人たちの間には、絶え間のない紛争が生じるのです。

6:6 しかし、満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道です。

6:7 私たちは何一つこの世に持って来なかったし、また何一つ持って出ることもできません。

6:8 衣食があれば、それで満足すべきです。

6:9 金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります。

6:10 金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは、金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し通しました。

パウロは全ての人は神の前に平等であると考えていました。しかし当時の社会には奴隷制度があり、主のみこころに反していたのです。しかし、パウロは社会制度を形だけ変えようとしたのではありません。人の心から変えようとしたのです。仮に制度を変えても、人の心に不平等な考えがあるなら、また同じことが始まるからです。その心とは罪から来ていることは言うまでもありません。

むしろ私たちはどんな制度の中にいようとも、主の祝福と恵の中に生きることができるのです。パウロは奴隷達にその生き方を示しました。私たちも仕事や人間関係において、「ますますよく仕え」ることで、益を受けるでしょう。それは主の栄光を表わすみこころです。

「敬虔」とは主のみこころを歩むことです。またそのようなライフスタイルです。「これに同意しない人」は、自分の好き勝手に生きたいがために、歪んだ自説を主張する人であつて、「紛争」のものになります。敬虔でありましょう。

その敬虔は神のみこころを第一に喜ぶ生き方ですから、お金を第一にすることはありません。金銭は大切ですが、必要以上にそれを求める人は「金持ちになりたがる」人で、結局金銭トラブルや罠にかかり、「自分を刺し通す」結果になります。「衣食」すなわち生きるだけのものがあれば十分です。それで「満足する」ところから人生を始めましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

